

ブルーノの死

清水純一

一 死をめぐるつて——問の提出——

一六〇〇年二月一七日、ローマもテヴェーレ河に近い「花の廣場」カムボ・ディ・フィオーリは、ときならぬ人群のなかに異様に寂まりかえつていた。焚刑の時が近づいていたのである。廣場の中央にはポンペイ劇場を背にして、一人の邪宗徒が裸にされ柱にくゝりつけられていた。「冒瀆の言を吐いたその口には舌枷をはめられて」この男は、最後にさしたされた十字架から顔をそむけると、やがて贖罪の炎のなかにつつまれていつた。⁽¹⁾

こうしてジョルダノ・ブルーノはその五十二年の生涯をとじる。ソクラテスが毒死してよりほゞ二千年。彼もまた殉教徒としてみずから死の道を選び、火刑の煙とともに昇天してゆくみずからの魂を信じつゝ従容として死んでいつたという。⁽²⁾「私に宣告をくだしているあなたがたのほうが、宣告をうける私よりも、もつと怖れているのではないか」⁽³⁾これがブルーノの残した最後の言葉であつた。

いさゝかつくり話じみてもみえるけれど、そしてまたしばしば反駁も試みられてきたけれども、これらの記録が事實であつたことにはほゞ間違いない。ガレイやカムパネルラとともに宗教反動の犠牲となつたブルーノの死は、二人とも悲劇的な死に方をしてゐるためだろうか、よくソクラテスのそれにくらべられる。劇的ということではしかしブルーノの方がいつそう劇的であつたともいえよう。二十八才で異端の疑いをかけられてナポリの修道院を逃げだし

ていらい十數年を異郷の旅にさすらい、ふたゝび故國イタリアにもどるとまもなく捕えられて審問の庭にひきだされ、八年の獄中生活を最後としてカムボ・ディ・フィオーリの風に消えるまで、數奇といえばまことに數奇な生涯をたどつてゐる。

このブルーノの死は、研究者たちの興味をそゝるらしく、その刑死をめぐつていろいろの解釋がほどこされてきた。とくにその死のもつ悲劇的相貌は多くの人々に感動的言葉を書き綴らせ、また一九世紀リソルジメントには獨立精神の英雄的象徴として國民統一運動の推進力ともなつたりした。死はいうまでもなく人間にとつて大きな問題である。とりわけ悲劇的な死はしばしば魅力ある刺戟劑になるものである。人々の心のうちにひそむ悲劇的なものへの憧憬、不可能なるものへの郷愁を、ブルーノの死とむすびつけて、彼のうちに英雄的理想像を探し求め、その姿を美しい想像の光輪につまませて浮びあがらせようとする解釋は、そのかぎりではより多くの心がまず捉えられやすい傾向を示すものといえよう。しかしそれだけにまた眞理の殉教者として強調されているブルーノに観にたいしては充分に疑つてかかることが必要だということにもなる。悲劇的結末というものはしばしば偶然的要素によつてつくられるもので、悲劇の外形にばかり捉われすぎていると、事の眞相はしばしば見失われがちになるからである。その死をことさらにとりあげて問題にしてゆくことは、してみれば、ブルーノ研究としてはあまり賢明な態度だとはいわれぬかもしれない。それにもかゝらず私のブルーノ研究は彼の死から出發せざるをえないのである。

ブルーノの晩年は死との對決であつたといえる。人間であるからには一度は死との對決をさけられない、といつてしまえば至極あたりまえのことのようだが、こゝでいう對決とは勿論それとはだいぶ異つた意味をもつてゐる。ブルーノの場合死はどうしてもさげることのできない運命としてではなく、なお選擇の自由にゆだねられていた問題であつた。欲するならば、死を免れることのできたソクラテスのように、彼もまたおそらく死を免れえたでもあろう。しかし自己の思想的信念にしたがつたブルーノは、ローマ法王廳への服従を拒絶して異端者として處刑される道をえら

んだ。

こゝでまず注意せねばならないことは、ブルーノの選擇が一時のゆきがかりでなく八年間の獄中生活の結論としてなされたということである。宗教裁判の庭にひきだされていらい、ブルーノの意識のうえには死の不安が濃く蔽いかぶさつてきたであろうことは、想像にかたくない。だがいわば死に直面した限界状況におかれた人間の一種異常の陶酔状態から死の選擇がなされたと考えることは、この場合不可能である。その間には幾度か妥協の機會があたえられながら、彼はこれを拒んだのであつた。その頑固なまでの自説のくりかえしは、ブルーノという人間の平常の態度を、またその選擇が冷靜な熟慮の結果であることを、我々に物語るに充分であろう。死の選擇はブルーノにとつてはむしろ生の選擇であつたともいえる。動物的生命の持續として無條件に生存の習慣にしたがつて生きてゆくことが死にまさるものとは考えられなかつたのである。「あゝ、人の運命さだめのいかなればとて、吾は、生ける死に死せる生を生くる」とは⁽⁶⁾ひとたび意識によつて對象化されるとき、生存はもはやそのまゝ盲目的に肯定されるものではなくなる。選擇され條件づけられた生存だけが、生きるに價し、生の名にふさわしいものではないか、それは既にはやくからブルーノの心を捉えた疑であつた。その條件とは何か。死にたいして選擇され肯定される生とはどのようなものであつたのか。

人はこゝであの有名な言葉を想いだすことができよう。「暴力にも奪われず、時にも腐敗せず、蔽えども滅せず、威壓にも潰えず……夜も断ち切ることをえず、闇も引き抜くことのできぬ」もの、それは眞理である。「眞理こそ萬物のうちでもつとも眞剣なもつとも神々しいものである」⁽⁷⁾ブルーノのうちに燃えるこの眞理への情熱が、彼に生よりもむしろ死を選擇させ、眞理の殉教者として悲劇の道へと駆りたてずにはおかなかつたのであろう、と考えるならば、そこに私たちは超人的意志を具えた一個の理想的人間像を描きあげねばなるまい。ブルーノの意志を支えて彼に毅然たる態度を堅持せしめたものは、果してこの眞理の情熱であつたのだろうか。

ブルーノのうちには人一倍強い眞理への情熱が燃えつづけていたという推測には、なるほど多くの眞實がふくまれているでもあろう。しかし情熱のうつろい易さを認めているのも、誰よりもまずブルーノ自身であつた。「心誘う燈火ともしびに向つて舞い飛ぶ胡蝶は、炎にやかれて亡ぶ身のすえをしらず、渴きにせかれて清流せきりゅうにいそぐ牡鹿ましかは獵夫やうとの矢の苦きをしらぬ。」獄窓におくつた八年間、眞理への情熱がかわらぬ強さで彼の毅然たる態度をささえていたとは、むしろ考へがたいのである。事實この期間にブルーノの心の動搖を示すともとれる記録ものこつている。むしろそこから人は、あるいは彼の變節を、あるいはふてぶてしい偽瞞や強情ないゝのがれを、見つけることもできるであらう。獄中の彼に眞理に向つてまつしぐらにすゝんでゆく聖者の姿をみいだそうとする期待は失望に終るであらう。往々にしてブルーノにあたえられてきた情熱的英雄像は、資料によつて知りうるありのままの人間ブルーノをおしまげずには生れない。とはいふもののまたこの動搖だけを強調してみても、ブルーノの態度を充分に説明することはできない。獄中のブルーノをおそつてその心を動搖させ自分の生き方に反省の目をむけさせた疑は、べつに獄中生活という特殊な外的條件によつてはじめて生れたものではなく、すでに昔からブルーノのうちにあつて彼の情熱をひやゝかに監視しつづけたものではなかつたか。「美しき憧れに羽搏いて空高く飛昇するイカルス(8)は」地に墜ちて死すべきことを知る。されど、如何なる生の、吾が死にふさわしきものぞ」身(9)をやく情熱のさなかにもなおそのむなしさの意識は彼から離れてはいなかつたのである。こうしたブルーノのうちに、私たちは、情熱を素朴に信じて眞理の道を邁進するオプティミストとはほど遠い、むしろたえず新しい疑いをくりかえしつづける懷疑者の姿をみとめぬわけにはゆくまい。といつて彼の生涯はいわゆる懷疑主義者のそれでもない。己れの道にたえず疑を向けながらも、その獄中生活に示した毅然とした態度は、その底に流れる首尾一貫した精神の持続を物語つている。深い懷疑につままれながらも生きることとを希求させた精神、この精神こそ彼に死を選択させたものではなかつたか。

ブルーノと相前後して宗教裁判の犠牲となつたガリレイは、彼とはまた異つた道を選んだ。ガリレイは法王廳の要

求に服従して自己の思想を撤回すると公言して、ともかくも死刑を免れることができた。それはよかれあしかれガリレイの生き方であつた。これとは逆にブルーノは自己の思想を貫こうとして死をえらんだ。その死はたんなる獄中生活の結末ではなく、ブルーノの選擇した生き方であり、彼の思想の決算であり、彼の哲學の結論であつた。

この死を出發點として哲學者ブルーノの人間像を追求しようとするのが本論文の意圖である。人生にたいする疑問のなかでなおも一つの生を希求させた精神とは、その精神に映つたあるべき生とは、どのようなものであつたか、それが問題である。そのためにはまず獄中生活に示されたブルーノの人間態度を資料にしたがいながら再現してみることが必要であらう。

- (1) 以上の背景は Doc. Rom. XXIX, XXX, XXXI によつて再構成した。XXIX は *Relazioni della Compagnia di S. Giovanni Decollato tom. XVI* にある記録。XXX は Ritterhausen に宛てた G. Schopp の書簡。XXXI は MS. vaticano-urbinate n. 1068 にある一六〇〇・一一・一九日附の *Avvisi e ricodi* にあり當時の新聞ともうべきものである。ブルーノ最後の情景については少なからぬ傳承が残つてゐるが (cf. P. Romano; *Revisiscenza bruniana* 《L'osservatore romano》 1947) 信頼しうる資料としては、上の三つと法王應裁判記録があげられる。とくに Schopp の書簡は、目撃した事實を詳細に綴つたもので、Bartholmess はじめ Bertii, Proveii, Frith らに引用されて有名になつたものである。Gaspere Schopp (一五七五—一六四九) は Heidelberg, Ingelstadt で勉強したのち Alorf に赴いて Torelli の弟子となりながら法律學者 Ritterhausen の愛顧をえていた。この書簡はイタリアに旅行して各地を經歷していた間に、たまたまローマでブルーノの處刑にであつてしたためられたものであるが、その頃このドイツ青年の心情は、プロテスタントから次第にカトリックに親近感を覺えつつあつたようである。

(2) Doc. Rom. XXXII には XXXI と同く。

(3) “*Maiori forsan cum timore sententiam in me fertis quam accipiam*” Doc. Rom. XXX の書簡によつて

(4) この反論は Bertii によつて明かにされた法王廳の記録自身によつて確認されるまでは、しばしば、主としてカトリック學者によつてくりかえされてきた。たとえば Haym や Quadrio は、灼かれたのはブルーノの肖像であつたといつてゐる (cf.

P. H. Michel; G. Bruno, *Philosophie et Poète*, 1952, *Ordre, Désordre, Lumière* p. 133)

(5) ブルノーの死に關する解釋で最大の問題點となるのは、八年間の審問中にあらわれたブルノーの態度の變化である。すなわち、ヴェネツィア審問の冒頭に示されたブルノーの強硬さ、全面的な自己肯定の態度は、二月後になると自分の誤ちを認めて宥しを乞う謙虛な態度にかわる。またローマ審問の末期では、自説を放棄する用意があるといつていたのが、再轉して頑強な無言の抗議を示すに至つてゐる。この態度の變化を如何に解するかによつてさまざまの解釋が生れてくるが、諸解釋を大別すると次のように分けられるであらう。

(一) 肯定的—ブルノーの不撓不屈の英雄像を描くことに力點をおくもので、いわばブルノー解釋の主流をなしてきた傳統的解釋といふべきもの。あるいはこの變化を無視せぬまでもむしろ萬人に共通する人間的心理として重視せぬもの (D. Berti; *Giordano Bruno* 1889) あるいはイタリアの國法ともうべきカトリックの規律に服したのは、マテナイの法にしたがつたソクラテスと同じであるとするもの (G. Gentile; *G. Bruno e il pensiero del rinascimento*, 1920) など。

(二) 否定的—カトリックの立場からブルノーを異端の悪人ときめつけるもの以外にも、この變化をブルノーの心理的弱點として考へるもの。もつともこれにも、赦すべき心理動搖とするもの (F. Tocco; *Le opere di G. Bruno*, 1889) から、ブルノーの發狂を主張する極端なもの (P. Romano; *op. cit.* 1947) あるいはブルノーの心に一時よみがえつた信者の良心と考へるもの (A. Mercati; *Il sommario del processo di G. Bruno*, 1942) などである。

(三) 二重的—ローマ教會への服従と自己の哲學的信念の貫遂という兩方をブルノーは意識的に使ひかけたのだと考へるもの。これを教會の壓力から逃れるためのブルノーの偽裝であるとするもの (F. Fiorentino; *La filosofia della Rinascenza*, 1938) ブルノーの妥協をはかつたのは信仰の面であつて哲學的思想の主張は終始一貫されてゐるとするもの (L. Firpo; *Il processo di G. Bruno*, 1949) など、これと對照して考へるもの (E. Garin; *La filosofia*, 1947) がある。

私としては、今日までに明かになしなかつた資料を綿密に検討してゐる Firpo の説が最も説得されるべきものだと考へる。

(6) *Op. ital.* II, p. 353 (*De gli Eroici Furori*)

(7) *ibid.* p. 84 (*Spaccio*)

(8) *ibid.* p. 362 (*De gli Eroici Furori*)

(9) *ibid.* p. 369 (*De gli Eroici Furori*)

起伏にとんだブルーノの生涯については、まだ詳かではないいくらかの諸點がのこつているとはいうものの、およそ大過なくその閱歴を跡づけることができる。しかしこの資料解明の歴史も彼の生涯におとらず迂餘曲折の運命をたどつたもので、とりわけ晩年の八年間にもおよぶ異端諷問の記録は、その内容からしてもその運命からみても、もつとも興味ある裁判記録の一つに数えられている⁽¹⁾。

さてブルーノ悲劇の最終幕はヴェネツィアの舞臺からはじまる。一五九一年秋ブルーノはドイツからイタリアにもどつてきた。「去年フランクフルトにすんでおりましたときに、ヴェネツィアの貴族ジョヴァンニ・モチエニゴから二通の手紙をうけとりました。文面によれば、ヴェネツィアにやつてきて記憶の術・發明の術を教えてもらいたい。待遇も充分にして満足のゆくようにするから、という招聘状でした。それで私はやつてまいつたのです。たしか七、八ヶ月前のことでした」⁽²⁾一五九二年五月二六日ヴェネツィアの法廷に立つたブルーノはこうこたえているが、イタリアに足をふみこむことはあらかじめ相當の危険を覺悟せねばできなかったことではないか。おとろえたとはいえローマ教會の勢力はなお全半島におよんでいたし、おりからカトリック勢力の回復に躍起となつた法王廳は、ジェズイット派を中心とする異端審問の網を強化し、全イタリアは宗教反動の第一の波にのりかけたところである。そこへ、かつて一度ならず教會にそむいて逐電した人間が、いくらそれが十五年も昔のできごとで、赴く先がローマ法王廳の勢力から完全獨立を目指すヴェネツィアだとはいふものの。「ブルーノが戻つてきてあなたのところを教えているという噂を耳にしましたが、本當でしょうか。私はかつて(ヴィッテンブルクで)彼が亡命中の身の上だということを彼自身の口からきいたことがあります、そのような男がまたおめおめとイタリアにもぐりこんでいようとは、まつたくびつくりしています。この噂の出所はかなり確かな筋なのですが、それでもいまだに信じられません」⁽³⁾こんな手紙も

のこつているほどブルーノの歸國は當時の人々にとつては意想外のニュースだつたのである。それほどの危険を犯してまで何故ブルーノはイタリアにもどつてこなければならなかつたのが、まず明かにすべき問題であらう。

第一にヴェネツィアおよびその都市におけるモチェニゴの勢力はブルーノの危惧を弱めるのにあづかつて力あつたものと考えられる。一六世紀のヴェネツィアは強力な権力をもつた獨立共和國であつた。地中海交易の重要な港としてトルコに對抗する大海軍を擁しながら大陸の玄關口を占めたヴェネツィアは、イタリア半島屈指の商工業都市であつたばかりでなく文化活動でもヨーロッパ一流の中心地だつた。したがつて政治的自負心も高く、ローマ法王廳をはじめとする諸外國の政治的干渉にたいしてはつねに獨立の立場を堅持するようにと氣をくばつていた。そのうえにヴェネツィアは、ほかのイタリア諸都市にくらべると市民と政府とのむすびつきがいまだに強くのこつていて市民的自由の空氣が濃く、またこゝを訪れる諸外國人の數も多かつたので、フィレンツェの亡命者ピエトロ・ダ・ピビエーナの例にもみられるように、政治的亡命家にとつては比較的安全な隱遁地の一つと見られていたのである。⁽⁴⁾ しかもモチェニゴは當市の名家の一つであつて、その保護をあてにできるからには身にふりかゝる危険もかなり樂觀できるものと考えられたであらう。⁽⁵⁾ 第二に考えられるのは祖國への郷愁という心理的要因である。ブルーノの心のうちには、古い過去のさゝいな事件のことなど法王廳でももう忘れているかもしれないといつた甘い想像もあつたであらうし、また寛容だという世評も高かつた時の法王グレゴリウス一四世にかけられた灰い期待もあつたかも知れない。⁽⁶⁾ とりわけ十五年にもおよぶ定めない流浪の旅がブルーノに安住の地を懂れさせたと推測することは決してむりではない。ながらく見ぬ故國イタリアのすみぎつた青空は、ブルーノの心をときおり烈しい郷愁でゆすぶつたにちがいない。⁽⁷⁾ さらにまた、ヴェネツィアは世界に名高い印刷術の都で、著述の刊行を切望していたブルーノがそれをこの都で實現することは彼の秘かな願でもあつたらう。⁽⁸⁾ だがこれらの理由も、「太陽を父とし大地を母とし宇宙を棲家とする世界市民」と自稱するブルーノに、しかも久しぶりに安靜の日を樂しみえた町フランクフルトの自由な空氣をすて、火中に粟を

捨うような旅をおもい立たせるにしては、あまりにも消極的ではなからうか。彼のヴェネツィア行にはほかにもつと強い積極的理由が秘められていたのではなからうか。この疑問にたいして提出されたコルサーノの解釋は興味深いものに思われる。⁽⁹⁾

彼によれば、ブルーノ歸國の主動因は宗教改革への情熱であつた。ちやうどブルーノがその刊行を切望していたいわゆる彼の未刊作品、とくに「魔術論」De Magia「因縁論」De Vinculisの分析をもとにして、コルサーノは當時のブルーノの關心が實踐活動へと向つていたと判定する。汎神論的宇宙觀を背景とした「人間愛」の思想は、生成發展のうちに實在する宇宙的「因縁」の洞察とむすびついて、これをもとにしてそのうえに理想社會を實現すべしという宗教的信念にまで高まつていた。これまで眞理の抽象的冥想へ向けられていたブルーノの目は、一轉して社會倫理へと轉じ、福音の實現としての世界の再建へと彼の心を駆りたてたのだという。今やナポリの革命家カムパネルラを襲つた同じ神秘的情熱が、ブルーノを襲つた。ときあたかも宗教的内亂にあえいでいた舊教國フランスがナヴァール王アンリ四世によつて新しい第一歩をふみだしたことは、王と交渉をもつたこともあるブルーノにとつては一つの刺戟劑でもあつた。⁽¹¹⁾モチエニゴからの招聘状が到着したのはたまたまこういつた状態のときだつたのである。そこで彼はこの改革の夢を、全ヨーロッパをつゝむ宗教改革期の息吹のなかで、ヴェネツィア貴族の援助のもとに實現しようと考えて、イタリア歸國の道を決意したのである。

コルサーノの推定はだいたい承服できるものと思われる、が、社會改革の意圖をあまり確定的なものとして考えることはどうであらうか。ドイツ時代の形而上的冥想を通して自分の統一的世界觀人世觀を確立するに至つていたこの頃のブルーノが、その關心を哲學的冥想から實踐的實現へと向けていたことは間違いないようで、ヴェネツィア審問にあらわれたブルーノの言動も、この推定をうらづけはしても決して否定するものとは思われない。しかし改革の實行についてブルーノが結社組織をつくつていたとか、あるいは同志を募つていたとかいふ事實をうらづけける資料は、

何一つ見當らないのである。また改革實現の手段としても、ローマ教會以外の勢力を利用するか、それともローマ法王廳そのものの内部改革を通して行うかについても、確定した方針はなかつたようである。⁽¹²⁾つまり長い間冥想的生活を⁽¹²⁾おくりまた本質的にも實踐活動の得意な人間とはいえないブルーノは、社會改革については何の實際的準備もないまゝに、しかし心のなかには暗い烈しい期待をもちながら、ヴェネツィアに歸ることを決意したものであつたと思われる。ヴェネツィアについたブルーノは、まずモチエニゴの邸を訪れたが、それから數ヶ月の足跡はさだかでない。多分ヴェネツィアかパドヴァの旅宿に居をかまえて、主としてパドヴァ在住のドイツ人學生を相手に個人教授をしたり、弟子のベズレルと著述出版の準備をしたりして、⁽¹⁴⁾かなりの時を費したものである。モチエニゴの邸に本格的に移り住んだのはそのあとのことである。⁽¹⁵⁾ここでも弟子への個人教授にとりかゝるかたわらヴェネツィアの華やかな貴族社會に顔をだして、當時盛名の高かつたモロズイーニとも知合になつたりしている。⁽¹⁶⁾しかしブルーノのいだいていた期待はまもなく崩れ去つた。なによりの誤算はモチエニゴにあつた。翌年五月二二日の夜、ほかならぬモチエニゴその人によつて、ブルーノは司直の手にひきわたされ、ヴェネツィア異端審問の裁廷に立たされることになつたのである。

(一) C. Bartholmäss; Jordano Bruno (1846-47) 以來ブルーノに關する關心、わけでも晩年の裁判記録にたいする關心はようやく高まつたが、異端審問記録という資料の性質上調査は困難であつた。ブルーノの焚刑が法王廳の記録によつて確認されたのはやつと一八四九年のことであつた。この調査に本格的に着手したのが第一に Berti で、彼はまず Venezia 審問記録を調べるために一八五八年にヴェネツィアにでかけた。しかしその折は僧院の秘事とされてきた異端審問記録にふれることは許されず「失敗に銷沈しながらもまたの好機を心に決して立去つた」ところが好機は思いがけず訪れた。ヴェネツィア當局の好意によつて文書の寫しが一八六二年に贈られてきたのである。一八七〇年にはさらにローマからも若干の資料を與えられたので、そこで彼は審問を中心とする資料を附してブルーノ研究に劃期的な D. Berti; Giordano Bruno, Sua Vita e sua Dottrina, 1889 を著わした。これによつて Venezia 審問の委細は明かになつたが Roma 審問については依然として謎

であつた。法王廳に残つてゐる一切のブルーノ資料を公開すべしという聲はその後も次第に強くなり、これを好まぬ法王廳との間に交渉の曲折があるが、結局法王廳側も折れて残存資料の公表に同意することになつた。V. Spanpanato; *Vita di Giordano Bruno*, 1921 はこれらの資料をもとにして彼の生涯を跡づけた徹底した研究で、その最後にはこれらの資料が附されてゐる。また資料部分のみは V. Spanpanato; *Documenti della Vita di G. Bruno*, 1933 として *Gentile* にちつて新たに獨立刊行された。とはいうものの、これによつてもまだローマ審問記録の謎がとかれたわけではなく、Roma 審問の全貌が明かになつたのはやつと一九四八年のことであるが、ローマ審問の資料解明史については、後註四の(8)を参照されたい。

(2) Doc. Ven. Ⅷ.

(3) これはボローニヤに滞在してゐたドイツ人 Valens Achidalus がバドヴァの Forgeaz に宛てた一五九二・一・二二日附書簡の一節である (cf. *Vita* p. 511)

(4) 當時のヴェネツィアの空氣については例えば Bert; *Vita* pp. 257-61 参照。Pietro da Bibbiena は大ロレンツォの書記でまたその息子の親友でもあつたがシャルル八世のフィレンツェ侵入に際して(一四九四)ヴェネツィアに亡命した。この自由な空氣はブルーノの頃もお残つてゐたようである。そのことはバドヴァからフィレンツェにガリレイが歸國したとき、その地での危険を案じてバドヴァの自由な空氣に戻るよう希つてゐるガリレイの親友サグレードの言葉からも知られるであろう (cf. S. Drake; *Discoveries and Opinions of Galileo*, 1957 Anchor 版 pp. 65-67)

(5) ブルーノを招聘した Giovanni Mocenigo は Venezia でも名の知れた財閥貴族 Marcantonio Mocenigo の息子で、彼の兄弟は Savio del collegio の十六名の一人として名をうりおぼつた (*Vita* p. 531) 當時の collegio は Doge の最高査問機關として二十五名の人員からなつてゐた。即ち六名の consigliere と三名の capo delle quarantie 及び十六名の savio と、うち六名は savio grande 五名は savio di terraterma 五名は savio di mare であつた。Mocenigo の兄弟は savio grande (大奉行) の一人であつた。

(6) もつともこの期待はすぐ裏切られた。ブルーノ裁判に關係のある法王の名をあげれば、Gregorius XIV (1590-91) Innocentius IX (1591) Clementus XIII (1592-1605)

(7) ブルーノ歸國の動因を故郷への郷愁に求める心理的解釋は Bartholmess (Op. cit. p. 184) 以來の傳統的解釋である。例えば彼の場合でも、ブルーノの郷愁を重視して何とかもう一度イタリアをナポリをヴェスヴィオをみたいという念願がブルーノの死

1ノ歸國の主動因となつたと推測してゐるのであるが、すでに當時スペインの勢力下にあつて一五六三年九月には異端審問を厳しくする旨の布告まで發せられてゐることを知つていながら、しかもブルーノがこの生れ故郷ナポリに歸れるという甘い夢をいだいてゐたとは考えがたいのである。

(8) 當時のヴェネツィアの印刷事業の状況については *Vita* pp. 453-56 や *E. de Grolier: Histoire du livre* (邦譯六九頁白水社) 参照。またブルーノ自身も彼の著書がヴェネツィアで印刷されたとの世評があるがその眞偽如何という審問官の間にたいして次のように答へている「人々がヴェネツィアで印刷されたものだと思ひこんで面白いといふが、實はイギリスで印刷されたものです。出版者はヴェネツィアで印刷したものだといはるのですが、それは容易に深山賣らんがため、イギリスで印刷されたというよりも賣行がよくなるからです」(Doc. Ven. XI)

(9) 當時のフランクフルトは「商工業の榮えた町でカトリック教徒もプロテスタント教徒も共棲し、諸國からもさまざまの旅行者があつまつていたので、その平安と繁榮をまもるためにも、とりわけ宗教的思想にたいしては自由寛容であらざるをえなかつた」(Berti; op. cit. p. 241)

(10) cf. A. Corsano: *Le pensiero di Giordano Bruno nel suo svolgimento storico*, 1940 年 pp. 280-85

(11) 告發者 Mocenigo の陳述に「ブルーノとナヴァール王との關係を示唆する次のような言葉がある。「さらに私は彼(ブルーノ)が次のようなことを語つてゐたのを想ひだしました……この世界はこのままで續くことはできない……立派な宗教は一つもない。カトリックは中ではよいほうだが、これとて大肅正が必要だ。このままでは駄目で、こんな腐敗状態がながくつづくわけはないから世界にはきつと日ならずして根本的な自己改革が訪れるであらう。ナヴァール王には大きな期待がよせられる。だからともかくも一刻も早く自分の著述を刊行して、この道を人々に信じさせたいものだ。その晩には自分は首領となるであらう……」(Doc. Ven. IV.)

(12) ブルーノが改革のための政治結社をつくらうとしていたという推測の根拠は前述のモチェニコの證言(前註参照)やチェレスティノの證言(第五節の異端項目二〇参照)にあるが、ブルーノ自身はこの事實を否定してゐるし、これをうらづける資料はない。したがつてコルサーノ説はブルーノの内面的傾向については實證しえても、その實際活動については實證しうる材料がないといわねばならない。ヴェネツィア審問のブルーノの言葉からしても、彼はなおローマ法王への期待をすてていないのであるし(Doc. Ven. IX, XVIII) 彼が著述の刊行をさしあつての願とし、またローマで哲學の教授をして暮らしたいと願つてゐるところからみても、ブルーノはこの改革をどのように實行するかまだ決つていなかつたと考える方が妥

當であらう。

- (13) バドヴァには當時ドイツから多くの研究家があつまつていて註(3)の Forjaz もその一人であつた (cf. Vita, pp. 462-65)
- (14) Girolamo Kesler は Helmstädt, Frankfurt 以来の忠實な弟子で彼の著書出版に協力していた。ここでブルーノが出版を目論んでいた書名は De sigillis Hermets et Ptolemaei (紛失) De vinculis in genere, Lampas tringinta statutarum であつたと考えられる (cf. Ciautini; G. Bruno 1950)
- (15) ヴェネツィア審問の證人の一人である出版業者 Ciotti によれば「(七、八ヶ月前ヴェネツィアにやつてきたブルーノは)三月ほどヴェネツィアとバドヴァの間をいつたりきたりしていました」(Doc. Ven. VI)
- (16) Andrea di Jacopo Morosini はヴェネツィアの高名な政治家でありまた歴史家としても有名であるがその學識と人格は「ヴェネツィアの輝く星」とも呼ばれるほどの人望をあつめ、大運河の畔にあつたその邸には、後にはヴェネツィアの Doge となつた Donato N. Contarini をはじめ Sardi や Galizi など有名人がいつも出入していた(もつともガリレイがバドヴァにやつてきたのはブルーノ逮捕後數ヶ月のことである)ここへはじめてブルーノをつれていつたのは出版業者チョッティで、その後はブルーノもたびたびでかけて、哲學論議などに花を咲かせていた。モロズイーニもまた證人の一人として裁判に出頭している。彼の證言は、控え目ではあるが、決してブルーノに悪意をもつていとは思えぬもので「自分は彼の論議からは信仰に反するという印象は全然うけなかつた」ともべている (Doc. Ven. XV)

三 ヴェネツィア審問

「私、ズアネ・モチエニゴは、良心の義務にしたがい懺悔の命ずるままに、私宅にていくたびか議論したこともあるノラ人ジョルダノ・ブルーノにつきまして、聞き知りましたことを上訴申しあげます」という言葉ではじまるモチエニゴの告發狀は、つゞいて彼がいかに惡辣なカトリック反逆者であるかということ、彼が耳にしたというブルーノの言葉、つまり、キリストは惡黨だとか、宗教はどんなものでも嫌いだとか、奇蹟とはキリストの行つた魔法だとか、處女が子を胎すはずがないとか、僧侶はすべてろばだとか、などなどを證據として断定し、さらに傍證としてプ

ブルーノの著書三冊と三人の證人の名をあげて、今では逃亡するおそれが見えたので一室に監禁してあるから、どうか一刻もはやくこの悪魔にとりつかれた男を御裁斷下さるようにと願つてゐる。⁽¹⁾三人の證人としてあげられたものうち、二人は出版業者のチョッティとブリクターノ、あとの一人はモロズイーニである。⁽²⁾

自分で招聘した教師を自分の手で告發するとは、それだけでもずいぶんいかゞわしい行爲であるが、それにしてもモチェニゴはなぜブルーノを告發するようになったのか。ブルーノの前身を知ることにつれて教會にたいする不安の懸念がだんだん強まつていつたのはたしかであるが、チョッティの證言にてらしても、告訴の理由が彼のいうように宗教的後悔という殊勝な心情だけから生れたものでないことは明白である。ちようどその春の降誕祭にフランクフルトで催された書籍展にでかけようとしていたチョッティは、一日モチェニゴにあつてこゝろ訊ねられた。「あの男（ブルーノ）は澤山のことを教えてやると約束して品物や金を受けとつたくせに、わたしはまだ何一つ結論らしいものもつかめないままでいる。ひよつとしたらあいつはいかさま師なのではなからうか。フランクフルトへいつたら、面倒だろうが、あの男が信用できる人間かどうか、約束しただけのものを期待してよいものかどうか、ひとつ調べてもらえないだろうか」そして歸國したチョッティが、いろいろの學者にあつて聞いた噂を綜合すると、ブルーノはフランクフルトではなかなかかさかんに記憶術や秘術のようなものを教えていたが、學んだものは満足できなかつたようで、なかには「彼はいつたいどうやつてヴェネツィアで暮しているのです。こゝでは無宗教の人間だと思われているのですがね」などという者もいたむねを告げると、モチェニゴは「わしもそうらしいと睨んでいる。だがあたえたものをふいにしないためにも、あいつが約束したことから何が得られるかみてやりたい。それから審問所に引渡してやるわい」とこたえている。

ブルーノがモチェニゴにとつて満足しうる教師でなかつたことは疑うべくもない。それはブルーノが異端者であつたためというよりは、ブルーノの授業がモチェニゴの期待したものをあたえなかつたからである。ではモチェニゴの

期待したものは何であつたのだろうか。おそらくは彼はブルーノが魔法使でもあるかのように思いこみ、その秘法さえ習えば自分にもまたすばらしい記憶力が授かるとても信じたのであろうか。⁽⁵⁾しかるにブルーノが教えると約束した記憶術とは實はライモンドゥス・ルスの記憶術にみられるような一種の範疇論にほかならなかつた。それをブルーノはこゝでも他處でしとおなじようにたつぷり講義したわけである。⁽⁶⁾當時の典型的な「文化貴族」の一人が、フランクフルトの學生以上にブルーノの授業に失望したことには何の不思議もあるまい。しかもブルーノの授業から成果をひきだしえなかつた責任が自分の無能力にあることを反省しえないモチェニゴは、ブルーノが知つていてわざと教え吞みしている意地悪かそれともまつたくのいかさま師か、と猜疑心をめぐらしてくればくるほど、授業料まで拂つて學ぼうとしたことが腹立たしくもなり、また一つには異端者を匿まつていたという嫌疑のほどもおもんばかられて、意趣返しと教會への忠義すらという一石二鳥の策を實行する氣になつたのであろう。とすればモチェニゴも、とくに並外れた邪惡の人間だともいえぬ、むしろそこらにありふれた虚榮心は強いが權威にはびくびくものの小賢かしい人間の一人に過ぎないようである。そもそもブルーノとモチェニゴとの接觸にはそのはじめから根本的な食い違ひが存在していたのである。⁽⁷⁾モチェニゴにとつてはブルーノが氣狂いに見えたように、モチェニゴもまたブルーノにとつては問題の外におかれた人間であつた。ブルーノには別の問題が、まだなすべき仕事かのこされていた。モチェニゴがブルーノにとつて意味を失うと同時に、彼の心もヴェネツィアを離れた。さしあたつてなすべきことは新しい著書を出版することだと彼は考へた。これを通じてその理想を人々に知らせることが必要だつたからである。その著書を眞先にローマ法王に捧げようと考へていたことは彼がなお法王を通じてカトリック世界を革新しようという希望を捨てなかつたことを告げるものではなからうか。⁽⁸⁾

モチェニゴとブルーノとの人間關係からこれ以上多くを知ることが期待できない。それよりもむしろ私たちは續いてはじまつた宗教裁判にあらわれるブルーノの言動から、彼の人間像を追究すべきであらう。モチェニゴの告發によ

つて、問題は對モチエニゴ關係をはなれて、ブルーノ對ローマ法王廳へとうつされたのである。⁽⁹⁾

モチエニゴの陳述と二人の出版業者の證言につゞいて、五月二六日に「小柄だががつしりしてわずかに黒い髭をはやした四十あまりの」男が被告席にあらわれた。この時ブルーノは四十四才であつた。

第一回の審問はこの日から六月四日までの間に五日間にわたつて行われた。⁽¹⁰⁾「私は眞實を申しのべます。これまでも審問所にひきわたすぞと脅かされてきましたが、冗談だとばかり思つておりました。私にはなんのやましいこともないからです」こう前置して、ブルーノはたずねられるまゝに、まずヴェネツィアにやつてきたいきさつと自分の生い立ちについて語り、自分が決してカトリックに反逆するものでないどころか「いつもカトリック教徒として生活してきた」ものであり、これからも「許され、俗衣をつけて暮したい」希望をもつてゐるむねをのべている。眞實の神の徒をもつて自任していたブルーノにとつて、異端者として罰せられることは心外なことだつたに違いない。それを、キリストは悪黨だとか奇蹟とは魔法の仕業だといつただろうと詰問され、なぜそんなわからずやの質問ばかりするのかと呆れかえり、はては兩手をふりあげて、「何ですつて！ いったい何奴です。そんな馬鹿げたことをいうのは！」と叫びださずにはおれなかつたのであろう。もつともこれらの告發がすべて根も葉もないモチエニゴのでつちあげだとはいえない。というのは、自らも認めてゐるようにブルーノはよく冗談や皮肉をいうので誤解されても仕方がないといえ、⁽¹¹⁾それまでであり、また事實彼のキリスト觀は正統のキリスト教徒からすれば神を汚すものとしか思へぬのも當然ともいえるのだが、少くともブルーノの眞意が彼等の推量とはほど遠いところにあつたことは確かである。ブルーノとすれば世間一般のいわゆるカトリック教徒よりは自分のほうがよほど神に敬虔なものと考えていたであらう。とはいふものの自分の考えがなんの説明もなしにそのまゝ世間に通用するなどと思つていたわけではない。だから、これまでカトリックの信仰に反することを教えたり考えたりしたことはないかという問にたいしては、直接的にはないけれども間接的にはあつたかも知れませんが、その理由を説き明そうとしたのである。

この審問でブルーノが力説したのは信仰と哲學の相違であつた。彼が自ら認めている反信仰的見解とは、アリストテレス的宇宙觀に反對して宇宙の無限をと考えたこと、本來一なる神にさまざまの理性的分析をくわえて考へてみたこと、世界を第一原因よりの創造として説明したこと、などであるが、それはこれまでも多くの哲學者たちによつて試みられてきたとおなじ哲學的説明であつて、信仰にしたがつてのべられたものではないという。物事を「自然の光のもとに」「原理にしたがつて」「理性的に」解明することを使命とする哲學は、信仰とはおのずから異つた方法をとらねばならぬのであつて、「哲學を職業」としている以上それはさけられぬことである。そしてこの哲學と信仰との相違が理解されれば自分の見解も理解されるものと信じたブルーノは、くりかえしこれを強調することによつて、一見信仰に反するようにも見える自分の立場が、そういう理解とはべつに教徒として教會教義を信じて生きることを否定するものではないことを理解させようと努めたものであろう。

しかしさらにブルーノは、教徒としての自分の信仰についても、きわめて正直に次のようにつけくわえている。その他の點では教會教義を信ずることのできた自分も、ただ三位一體の説だけは別問題であつた。神の受肉という教義は「哲學的概念として理解できぬばかりでなく、信仰としても疑いつゞげざるをえなかつた」これをどうしても信じえなかつた自分は、あるいはピタゴラスのようにロゴスを宇宙靈として、あるいはソロモンのように「神の靈は天地を充たし、かくして萬物を結ぶ」ものとして理解するほかはなかつたと。そしてさらに教會教義といへども哲學的解釋と同じようなものではなからうか。三位一體説とてもアウグスティヌスの時にはじめて確立されたものであつて所詮は歴史的解釋にすぎない。だから時がたち適應性がうすれてしまつた教義はむしろ改める方が正しいのではなからうかと。⁽¹²⁾通り一邊の回答をこえて被告の立場としては不利をまぬかれぬ「よけいな」⁽¹³⁾告白までくわえている大膽率直なブルーノの心のうちには、これだけの辨明でも異端の疑をはらすには充分であらうという自信はもとより、法王の許しをえて「俗衣をきてローマで哲學を教えながら暮したい」というかねての希みも、まだ可能性の灯をともしつ

づけていたのではあるまいか。

信仰と哲學との關係は、いまさらブルーノが主張するまでもなく、當時の人々の關心を集めていた問題であつて、いわゆる二重眞理の説と關聯してとくにパドヴァなどではさかんに議論されていた。見方によれば北イタリアを中心
に勃興しつゝあつた近代思想がカトリック信仰攻撃にたいして用いた自己防衛の論據ともなつていたものである。⁽¹⁴⁾これにたいしてトレント會議を境として積極性をましたカトリック宗教の反動攻勢は「唯一の眞理」を守るために、⁽¹⁵⁾ジェズイットの軍隊式訓練をもつて教會への絶對服従を強要する形勢にあつた。その意圖の一環をになう異端審問にブルーノのような要求をもちだすのがもとも無理な相談だつたともいえようか。その結果はかえつて彼の告白した三位一體説への疑念をいつそう追究されただけのことであつた。

それから二ヶ月の間において七月三〇日に再び呼び出されたブルーノは、この反省期間に何か告白すべきことを想い出さなかつたかと問われて、すでに申しのべた以上には何のつけくわえるべきこともございませんとこたえている。⁽¹⁶⁾が、このたびのブルーノの態度には前回までのそれと比較するとかなりの變化のあることを見逃すわけにはゆくまい。つづけてブルーノは、しかし自分の申しのべたことにも書いたことにもずいぶん「高慢ちきなゆきすぎ」のあつたことを認めて、「もつと申しあげますと、まつたくのところ、私はいつも良心に悔を感じて何とかしてこのような自分を改革したいと念じつゞけ、嚴格な規律服従のうちにもどることはなお躊躇いながらも、もつとやさしい方法でその効果をあげることはできぬものかと努力してきたのです」さらに、「私の誤を悔いている……この私の氣持を思うように説明するのは不可能です」と悔悟の情を表明し、膝まずいて「犯した誤の數々を宥し給わらんことを神と聖なる方々に乞ひ奉つ」たのである。

かつての説得的口調は影をひそめ、素直な謙虛さがそれにとつてかわつている。この態度の變化は果して何にもとづくものであろうか。それは、教會權力の威壓のまえにおののく哀れな人間ブルーノの姿か、罪をまぬかれるための

狡猾な擬態か、犯した罪の深さを自覺した心に立ち戻つてきた敬虔な宗教心か、社會規律に服すべしとの義務感か、それとも改革の理想を實現するために耐えねばならなかつた忍従⁽¹⁷⁾か。
(未完)

(1) Doc. Ven. I

(2) この三人はそれぞれ五月二六日及び六月二三日に出廷して證言している。ブルーノに不利な證言は本文にあげたチョツテイの言葉のみで、それもブリクターノの證言によれば、フランクフルトでブルーノが宗教者とみなされていたのは事實のようだが、評判はよく、一神父は彼を稱讃していたという。また三人とも、自分と話しているときは反カトリックの態度はブルーノに全然みられなかつたともいつている。證人がすべて原告によつてしかもヴェネツィアの有力な貴族モチエニコによつて指名されたものであることを考慮すれば、これらの證人がブルーノに悪意をもつていたとは考えがたい。

(3) Giovanni (Zuane) Mocenigo に「*グロツト*」ヴェネツィア一流名家の生れで、學問好きではあるが、空想家で精神も軟弱」といふ人物觀をはじめとして (Berti; Vita p. 246) 悪評は到るところに見出せるがその反論反證を見出すことは困難である。彼を知るための手がかりとして残つている當時の記録であるレオーニの書簡も、彼がなかなかの吝嗇で猜疑心も強い妄信しやすい人間であつたことを記しているが (Leoni; Lettere famigliari とくに一五八六・三・二二日附のそれ)、如何に名門の出とはいへ、一五八三年即二十四歳の時には選舉されて *savio* の一人に選ばれ、またこの審問の後一六〇一年及び一六〇五年にはさらに主要の役を與えられているところをみても (cf. Vita, p. 459) モチエニコは、氣の弱い好人物というよりは、ひとかどの狡猾さもそなえた人物だつたようで、それはチョツティへの言葉やブルーノ告發の芝居からも想像されるであらう。

(4) Doc. Ven. VI.

(5) cf. H. Höfding; *Geschichte der neueren Philosophie*, (1921 版) I Bd. p. 116

(6) Doc. Ven. VII.

(7) モチエニコがわざわざブルーノを家庭教師として呼びよせたことは、彼がブルーノの授業に何を期待していたかは別としても、當時の貴族の生活風習からみてべつに奇とすべきものではない。しかしブルーノについてはわずかの噂以外に何も知らなかつたようで、その経歴についても「自分が教授を乞うた人間がかくも悪黨であつたとは知らなかつた」(Doc. Ven. I) といつているのが本當であらう。だから「ブルーノは人を殺してテヴェレ河に投げこんだのがばれて法王廳に呼びだされブルーノの死

たのでローマを脱出したということです」(ibid) などというところでもない證言にもなつたのであろう。彼はブルーノの生涯について無知だつたようにその思想についても無知だつたようで著述についても二、三の題名を知つていただけで讀んだ形跡はない。つまり彼の告訴はすべて耳から聞いたこと、噂から成立つてゐる。

(8) 「私はここ(ヴェネツィア)を去つてもう一度フランクフルトに行こうと思つていました。私の若干の著書なかんざく *Delle sette arte liberali* を出版するために……それを私は法王の御許に捧げようと考えていました」(Doc. Ven. IX) この原稿はヴェネツィア滞在中にブルーノが書き上げたものらしいが、未出版のまま紛失してしまつたので、内容がどんなものであつたか知ることができない。

(9) 投獄までの模様はブルーノによれば次の如くである (Doc. Ven. III) 告發の前々日、恐らくはきたるべき不幸もうすすくと豫感されて、フランクフルトへの出發準備を整えていたブルーノの部屋にやつてきたモチエニコは「そんなに急いで出發したがるのは、フランクフルトで誰か他の者に教えるつもりだからではないか、などといひながら何とかして出立を思い止まらせようとはしました。それでも私が出發の意志をまげないのを見ると、はじめのうちは、まだ約束した分だけ習ひ終つていないと不平をいつていましたが、そのうちに、もし滞在延期を肯んじないのなら捕縛させてやるぞと脅迫しはじめました」つづいてその翌日、もう床についていたブルーノの部屋に、ちよつと話しがあると僞つてはいつてきた彼は、背後にしたがえてきた召使やゴンドラ乗りと覺しき数名の男に命じてブルーノを一室に閉じこめ「もしこのままとどまつてもつのように授業をつづけるなら自由にしてやるが、さもなければひどい目にあうぞ」と脅し、それでもなおブルーノが、もう充分すぎるほど教えてしまつたから教えるべきことは何もないと主張するのを聞くと、今度は地下室に監禁してなおも脅迫をつづけた。ブルーノが獄舎につなされたのは次の日の午後である。

(10) 第一回審問のブルーノの問答は Doc. Ven. VIII, IX, XI, XII, XIII にある。

(11) 彼の著作の多くは對話體であつて、その主人公はなかなか冗談すきの辛辣な皮肉家である。例えば *Spaccio* では聖靈と僧侶との關係を聖器とそれを運ぶるばに譬えてゐるし、*De gli eroici furori* では當時流行してゐたペトラルカ亞流の戀愛至上主義が散々に皮肉られてゐる。モチエニコはまたブルーノの品行にはいかがわしい點もあるとして、彼が「女は好きだが、ソロモンの上には及ばない」といつたという言葉を證據にあげてゐるが、そしてこれはまた「肉の罪に耽つた」という異端條項のものもなつたものであるが、そのような言葉は上の個處にも見えてゐる。なお、*Hörting* は「情熱の烈しさはコーカサスの雪をもつてしても溶かせない」という言葉をとりあげて、これをブルーノの情欲の烈しさにぞらえてゐるが

(op. cit. p. 107)の言葉も元來はペトラルキスト輩に投げられた皮肉であつて、いはば悪意なき誤解ともいふべき一例であらう。

- (12) Doc. Ven. XI.
- (13) cf. Ernest Baldi; G. Bruno, 1955 p. 69
- (14) cf. Eugenio Garin; La Filosofia, Vol. II, 1947 pp. 10-11
- (15) cf. G. Ruggiero; Storia della Filosofia, Par. III Vol. II pp. 191-208
- (16) Doc. Ven. XVII.
- (17) 前註の(5)参照

(筆者 廣島大學文學部〔哲學〕助教授)

次 號 論 文 豫 告

| | |
|------------------------|--------|
| 近代美術におけるアトム化……マックス・ピカソ | 佐野利勝 譯 |
| ヘーゲルの人間學の性格(下)……船山信一 | 船山信一 |
| ——體系に於けるその地位—— | |
| 「墨子」兼愛説に對する……保田清 | 保田清 |
| 倫理學的考察 | |
| ブルーノの死(完)……清水純一 | 清水純一 |